

善無畏 一行の『大日経疏』に聞く 密教とは何か

大正大学 名誉教授 福田亮成

3、夢の論
① 本文と『大智度論』の引用

【本文】

経に「復次に秘密主よ、夢中の所見の晝日、牟呼栗多、刹那・歳時等に住し、種種異類あつて、諸の苦樂を受くるが如きは、覚め已つて都て所見なし。是の如く夢の真言行行も心を知るべし亦た爾なり」と云うは、釈論に云く、「夢中に都て実事なけれども、これを実ありと謂うて、覚め已つて無なりと知つて、而も選つて自ら笑うが如く、人も亦た是の如し。諸の結使の眠の中に実は無なれども、而も著せり。道を得て覚る時、乃ち無なりと知つて、覚めて亦復た自ら笑う。又眠力を以ての故に、法無きに而も法を見、喜無き事に而も喜び、瞋無き事に而も瞋り、怖無き事に而も怖るるが如く、衆生も亦た爾り。無明の眠力の故に、瞋・喜・憂・怖すべからざるに、而も

【解説】

「牟呼栗多」とは mukurtia の音写語で時の単位、一昼夜の三分の一、「刹那」とは、kṣana の音写語で、きわめて短い時間のこと。「釈論」とは、『大智度論』巻六(『大正』二五・一〇三九)。

【現代語訳】

経に「またつぎに秘密主よ、夢の中に見るところの一日、一頃、一刹那、一年などの時に住し、多くの種々にことなる苦樂を受けるときは、覚めおわつてすべて見るものはない。このように真言行の夢もそのようであると知るべきである」と云うのは、『大智度論』巻六に、「夢の中はすべてが実際のことではないのであるが、これは実際にあるとおもい、覚めおわつて無いものであると知り、かえつて自から笑うように、



うれい・おそれなどを生ずるからである」と。

② 一念を千万歳とする

【本文】

今復この夢事の不思議の辺を明かす。夢の中の如きは自ら住壽一日二日、乃至、無量歳にして、種々の国土及び衆生族類あり。或は天宮に昇り、或は地獄に在つて諸の苦樂を受

【現代語訳】

いま、夢のこの不思議について考察するものである。夢の中では、一日二日、乃至、無量の歳の生涯に、種々なる国土や人びとの族類がある。あるいは天宮に昇り、あるいは地獄におちて諸の苦樂を受

受くると見る。覚むる時には但し一念の間のみ。覺心に於て眼法の因縁の中に四句をもつてこれを求むるに、了に不可得なり。而も夢事は照然として憶持して謬らず。一念を以て千万歳とし、一心を以て無量の境とす。此の事は世間の智者の憶度籌量して能く其の源底を尽すに非ず。亦た疑うべき処にも非ず。独り夢みる者のみ親子證知す。

【解説】

夢の中に一念を以て千萬歳

けると見る。覚める時には、ただし一念の間だけのものがある。夢の世界の因縁の中において分別をはたらかしてもとめても、ついに得ることにはできないのである。しかも夢の事はあきらかに記憶されてあやまることのないのである。一念をもつて千萬歳とし、一心をもつて無量の境とするのである。このことは、世間の智者の記憶し、考えても、その源底をつくすことはできないのであり、また疑うこともできないのである。ただ独り夢をみる人だけがまのあたりに知ることのできることである。

③ 真言行者の夢

【本文】

今、此の真言行者の瑜伽の夢も亦復た是の如し。或は須臾の間に備さに無量の加持の境世界を見、或は座を起たずして、而も多劫を経、或は遍く諸佛の国土に遊び、親近し、供養して衆生を利益す。此の事は諸の衆因縁の中に觀察するに、都て所起なく、一念の淨心を出でず。然も亦た分別して謬らず。此の事を誰か能く思議してその所以を出さん。

折り折りの記(27)

波多野 重雄

高尾山没して闇の涼しけれ

高尾山も台風被害の倒木の処理も速やかに行われ、再開通の一号路の休日は、想像を絶する人出であった。汗をかき登った頂上も夕日が沈むと、山は急に涼しくなった。

(高尾山健康登山親睦会々長)

甲州街道秋景

厚木市 荒井 一雄

黄葉舞旋風
飛散覆路上
高樹參秋天
孤雲遲運動

黄葉や鋪道を覆ひ風に舞ふ
(黄葉、旋風に舞い、飛散し路上を覆う。高樹、秋天に參じ、孤雲、遅々として動く。)
銀杏並木の黄葉は、つむじ風に舞い、飛び散つて道路を覆っている。銀杏並木の高い梢は、紺碧の秋の空に交わり、はぐれ雲がゆつたりと流れている。

然も実に独り證する者自ら知るのみ。行者是の如くの境界を得るとき、但し当に夢の諭を以てこれを観じて心に疑怪せず、亦た著せざるべし。即ち普賢色身の夢を以て無尽莊嚴をなす。故に深く十句を修すと云うなり。

【解説】

「須臾の間」とは、刹那ということ。「普賢色身」とは、普賢菩薩の具体身のこと。

【現代語訳】

いま、この真言行者の瑜伽の夢も、またそのようである。あるいは刹那の間にあきらかに無量なる加持の世界を見る。あるいは禪定の中に永い時間を経過し、あるいはあまねく諸佛の国土に遊び、ちかずき供養して人びとを利益する。このことは諸々の因縁の中に觀察するにすべては起きることなく、一念の淨心を出ることとはない、しかも分別してあやまることとはない。このことを思議して誰がその理由をあきらかにしえよう。実に証する者だけが自から知るのである。真言行者がこのような境界を得るときは、まさに夢の

4、影の論

【本文】

① 本文と『大智度論』の引用
経に「復次に秘密主よ、影の諭を以て真言(行者)の能く悉地を發すことを解了す。面の鏡に縁つて面像を現するが如く、彼の真言(行者)の悉地も当に是の如く知るべし」と云うは、此の中に影と云うは即ち是れ釈論の鏡中の像の

諭によりてこれを観じて疑うことなく、また執著してはならない。すなわち普賢菩薩の具体身の夢をもつて無尽なる莊嚴をなす。よつて深く十縁生句の觀念を修すというなり。

七五三おめでとう

大森隆裕御一家(皓介君の七五三)

